
「教育力のある」社会科学系科目のカリキュラム改革をめざして

—— フォールド・教室における対話を育てる教育手法研究 ——

研究代表者	松浦 さと子	(政策学部)
共同研究者	妻木 進吾	(経営学部)

「異文化」「他者」理解に向けた出会いの重要性 —— 釜ヶ崎スタディ・ツアー ——

妻木 進吾

人権論 B では、野宿者やいわゆるネットカフェ難民など、「ホームレス」と呼ばれる人々（以下、ホームレスの人々と略す）を切り口、あるいは出発点として、人権について考えることにした。なぜ、ホームレスを切り口、出発点とするのか。「自己責任」が強調されがちな現代にあって、ホームレスの人々は、「無責任の典型」と見なされているからである。そうした考え方は学生にも強く内面化されている。例えば、授業開始当初の学生のコメントには、「働く気がない」「自分の責任。何か努力すれば絶対脱出できる」「社会の仕組みから逃げた人(負け犬)」といった記述があふれる。そして、ホームレスという現在は、自業自得／自己責任の「成れの果て」であり、それゆえ彼／彼女らには「生きていて恥ずかしくないのか」「この世の恥」「犯罪者予備軍」といった差別的と言える表現を投げつけることも合理化される。人権を考えるにあたって、差別を合理化する、また、「救うに値する／値しない」の弁別基準とされる自業自得／自己責任という考え方との格闘は避けては通れない。

半期 15 回の人権論 B の授業展開は、ホームレスの人々が生み出される背景、生活実態、生活史、行政施策などについて、実証的なデータを提示しながら、自業自得／自己責任とは別様の問題の捉え方を、学生と共に模索する試みであった。毎回の授業終了時に学生が提出するコミュニケーションカードを A4 で 4~6 枚まとめたものが、教員と受講生、受講生間でなされるそうした模索の重要な舞台となった。こうしたプロセスを経て、受講生の問題の捉え方は——学生個人によって幅は大きく異なり、また行きつ戻りつではあるが——変化していく。端的に言えば、個人責任論では説明できないような社会構造的背景についての理解の深まりである。

ただ、こうした論理的に理解に加えて、自らの体験に基づく実感として当事者の生を理解することもまた重要である。「ホームレスは働く気がないのだ」といった考えに対して、「働きたいと思っているが仕事がないのだ」という説明は重要ではあるが、それでは説明できない人々（例外）が存在することもまた確かだからである。例外的な人々まで含み込んで説明する論理の構築と同時に、そうした人々の存在を排除的でない形で理解する一歩として、自らの体験として当事者や現場と出会うこともまた、重要な意味を持つ。そうした機会は、誰もが思い当たるようなちょっとした「怠け」や「努力不足」を探しだし、それをもってあらゆる理不尽を自業自得／自己責任と一蹴してしまう「構え」をずらしていく可能性をもっているからである。

そこで、人権論 B の受講生に呼びかけて、NPO 釜ヶ崎再生フォーラムが行っている「釜ヶ崎のまちスタディ・ツアー」に参加することになった。釜ヶ崎とは、大阪におけるホームレスの人々の主要な給源となってきた地域であり、またそうした人々を社会的に包摂しようとする取り組みが先進的になされてきた地域でもある。ツアーは 2013 年 12 月 21 日、人権論 B の受講生を中心に 9 名の学生が参加して行われた。

太子会館老人憩いの家での再生フォーラム代表による事前レクチャーを経て、再生フォーラムスタッフと「おっちゃんガイド」(元ホームレスで現在、生活保護を受給中の男性 2 人) の案内で、釜ヶ崎のまちのフィールドワークが行われた。あいりんセンター 1・2 階、NPO 釜ヶ崎、わかくさ保育園、西成市民館、四角公園、子どもの里、ふるさとの家、三角公園など、釜ヶ崎、ホームレ

ス問題のこれまでとこれからについてレクチャーを受けつつ巡った。最後に、サポーターハウス「おはな」にて、「おはな」オーナーとおっちゃんガイドの生活史が語られるとともに、学生へのメッセージが寄せられた。その後、懇談・質疑応答の時間が取られた。

学生は釜ヶ崎のまちを自ら歩き、授業で聞いたホームレスの人々の語りを、自ら聞くことになった。「おっちゃんガイド」の生活史は、上記した「例外」の典型であったが、半日を共に過ごした彼らを自業自得／自己責任と切り捨ててしまうことの酷薄さ、自業自得／自己責任で理解したつもりになる薄っぺらさを参加者は共有することになった。

実証的な根拠に基づく論理的な理解を促す授業展開の工夫と共に、学生が多様な人々と出会う機会を提供することの重要性を再確認することになるツアーとなった。

「大阪メディアフェス（第11回市民メディア全国交流集会）における市井の人々のメディアの営みを訪ねて」

松浦 さと子

マスコミ論ABでは、東京中心の大資本メディアと比較するかたちで、市井の人々はその生活、営みを起点に発信するコミュニティメディアに注目・参加をするよう促している。本年はそうした活動の全国のネットワークが大阪で交流集会（大阪メディアフェス）を開催することを告知し、9月21-22日にかけて應典院（大阪市天王寺区下寺町）とその周辺に受講者と政策学部の希望学生を引率し、メディアを創る活動を訪ね、その拠点の周辺を歩くことによって教室内の学びだけでは得られない体験に参加する機会を得た。

市井の人々の撮影した映像作品を喫茶店や銭湯などで上映し、対話を楽しむコミュニティムービーの草分けのひとつとして全国でも知られる「映像発信てれれ」の活動を主宰する下之坊修子さんが今年の事務局を担い、龍谷大学から参加する学生たちを指導くださり、そして開催をお手伝いさせていただくこととなった。時間的・資金的・人的な余裕がないながら、それぞれに独特なメディアを生み出している担い手の方々の協力を得て、毎年の開催形式とは異なる街歩きを含む大会プログラム「大阪フィールドワーク つなぐ大阪あっち！これもメディア！」で、全国から参加した人々とともに大阪の街を歩きながら、市井の市民が生み出したメディア制作に参加し対話した。この詳細は、主催者である大阪メディアフェス2013実行委員会のサイトにまとめられているが、コンテンツ制作を学生たちが担当し、徹夜で街歩きの状況を写真とコメントでpptにまとめて翌日のワークショップで上映報告し、参加者のみなさんからお励ましをいただいた。その成果の一部は次のサイトにまとめられている。<http://www.terere.jp/osakamedifes2013.html>

今回、全国からの参加者を迎えたのは、大阪を代表する市民メディア活動を展開している人々である。映像発信てれれ（浪速区）（尼崎市）（大阪市北区）（寝屋川市）（天王寺区）／NPO法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）（釜ヶ崎）／應典院寺町倶楽部（天王寺区）／2畳大学（中央区）／まわしよみ新聞（天王寺区）／まちライブラリー（浪速区、大阪府立大学）／ブレーカープロジェクト（西成なるへそ新聞）（西成区）といった、個性的で小さなメディア活動だ。学生たちも当初、それらの活動のメディアとしての意義についてほとんど「見る目」を持たずにいたが、その拠点を訪ねるまでの道のりにおいて、路上の人々、建造物、様々な業の営みに目を向け触れ合う機会を得て、それらの活動がそこで何故行われているのかの必然を肌で感じてきたようである。

本報告では、参加した学生が作成した報告書から一部記述を抜粋し、その成果報告としたい。

（1.感想、2.意義）

釜ヶ崎まち歩き編 3回生

1. 大阪における、様々な形式で多くの市民メディアに触れ合うことができたのがとてもよかった

です。情報の発信の仕方はそれぞれによって違うし、規模も違うかもしれません。しかし、今回このメディアフェスで出会った方たちは全員が、楽しみながら何らかの形で市民メディアに携わっていました。決して自分たちの利益になることばかりではないにも関わらず、生き生きとしていました。例えば、地下鉄御堂筋線・堺筋線「動物園前駅」から2分（JR環状線・南海「新今宮駅」から5分）に位置する、『NPO法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）』。ここはどんな人でも集まっていい場所、お喋りをしながら交流している様子が見え、地元の方たちの“生きがい”になっていると感じました。常に笑顔が絶えない現場はとても居心地がよく、これが本来のメディアの姿ではないかと思いました。

2. 私は「釜ヶ崎まちあるき編」に参加し、日本最大の寄せ場・釜ヶ崎の街の光景を知りました。街を実際に歩くことで、今まで全く知らなかった新しい発見があります。テレビやインターネット、新聞などのマスメディアにより植えつけられた概念を払拭することも可能です。今回まちあるきをしたあいりん地区では、高度経済成長を支えてきた方たちが被災生活を送っているように懸命に生きていました。医療センターの2階や公園で段ボールを敷いて寝ている人が数多くいました。また、自動販売機の飲み物が1本50円から売っていたり、物価が非常に安いのも印象的でした。これまでの“ただの治安が悪い街”という自分の中の固定観念はくつがえされたのです。自らの足で動き、得た情報こそが真実であり、何にも縛られることなく自由に得た情報を発信することが大切だと感じました。

釜ヶ崎まちあるき編 2回生

1. 今回の大阪メディアフェスでは、はじめて市民メディアに触れる機会となった。その「はじめての市民メディアに触れる機会」は、私にとって、「驚きの連続」だった。それは、私のなかでの「メディアの定義」が変わったという点においてであり、また、釜ヶ崎に行って、私のなかでの「当たり前」の定義が変わったという点においても、である。「メディアの定義」では、「電波を使わないメディア」という、私が「メディア」と認識していなかったものを知ることができたこと、「当たり前」の定義では、私が、如何に恵まれた生活を送ってきたのか、日本の成長を支えてきた日雇い労働者が送る生活との乖離を知ることができたことである。
2. 「昨日、ゼミ合宿で大阪・釜ヶ崎に行って来ました。ニュースで釜ヶ崎、いわゆるあいりん地区が、有数のスラムであることは知っていましたが、想像以上でした。ここが日本であるかどうかさえ疑いました。福祉センターの2階で段ボールを敷いて寝ている人。これが数人ではなく百人強です。また、コンビニのトイレには鍵がかけられていました。行きたいときには店員さんに鍵を開けてもらうというシステムです。この地域では、トイレ内で注射針が見つかることも多く、警察の指導で鍵を閉めているそうです。ここで過ごす方は、もうおじいちゃんになった日雇い労働者たち。日本の成長を支えてきた人たちです。今の日本をつくってきた人たちののに、僕たち基準の「当たり前な生活」が送れていないのか、と思うと、今一度、「当たり前って何なのか？」を強く考えさせられました。」

これは、私が大阪メディアフェスの次の日に、私の Facebook に投稿した内容を一部変更したものである。今回、これをこの報告書にも転載したのは、現在、残っている私の書いた文章の中で、最も「あのときの気持ち」が反映されているものだと考えたからである。この文章に書いたように、実際に「街を歩くこと」は、自分にとっての「当たり前」を覆してくれるものである。「当たり前を覆す」ことは、今後の自分の人生を見つめ直すことであり、それは思考の幅を広げてくれるものだと意義付ける。

映像発信でれれ尼崎「どるめん（喫茶）」上映編 3回生

1. 「参加者と主催者の隔たりがない。」イベントという主催者が参加者をもてなすイメージがある。しかし、今回参加した大阪メディアフェスは違った。参加者も催し1つ1つに客としてではなく、催しの一員として参加できた。例えば、阪急園田駅から徒歩5分（阪急梅田駅より4駅約10分）にある喫茶店の『どるめん』での上映会。これは映像を見て参加者が自由に映像の感想・意見を交換する形の催しであった。一方的に情報を与えられるだけでなく、1人1人の意見が生

かされる。これが大阪メディアフェスの良さであると感じた。

2. その土地の雰囲気を感じることができる。これが最大の意義である。私は、上記にあげた『どるめん』での上映会に参加した。上映会場の地理的な情報はインターネットからも得ることはできる。しかし重要な情報はそこではなく、その会場はどのような街の中にあるのかである。今回の場合、路上観察する前のインターネットだけの情報では一般的に上映施設があるようなガラッとした場所に立地しているのだろうと思っていた。しかし実際に訪れると住宅街の真ん中に位置していた。スーパーなども近くにあり、人々の暮らしに溶け込んだ場所であった。また人々に道を尋ねると、会場まで案内してくれ、温かい人が多いこともわかった。このような情報はインターネットには載っておらず、実際に調査しなければ得られない情報である。

映像発信てれれ尼崎「どるめん（喫茶）」上映編 2回生

1. 私は、阪急神戸線園田駅から徒歩5分の場所にある、喫茶店「どるめん」でてれれの映像を見せていただいた。どるめんの外見はとても個性的であり、他の周りの店より一際目立っていた。店内は時計が何個も置いてあったり、ウクレレが置いてあったりどこの国のものかわからないようなガラクタと、その期待を裏切らない個性で溢れていた。そんな中、お茶を飲みながら映像を見て、ディスカッションをしたことはとても新鮮であり楽しかった。
2. 百聞は一見にしかず。とよく言うが、まさにその通りだと思う。ネットでのデータ情報、人から聞いた話では、実際に街を歩いた時の情報量よりも圧倒的に劣ると言い切れる。実際にいったことで感じられる、雰囲気や様子それを肌で感じ、自分自身にその街の情報としてそれが入ってくる。このように自分の肌で感じることで得られるものこそが街の情報といえるのではないか。ネット、人の話で得られる情報と実際に街を歩き、肌で感じて得られる情報の差に街を歩くことの意義がある。

二畳大学 3回生

1. 二畳大学は、二畳という狭さだからこそ意見の言いやすい雰囲気が作れ、自分たちのしたいことを実現できるのだと感じました。たくさんの人でやりたい時は二畳大学というところが面白かったです。
2. 私は、直接人に会って考え活動したからこそ、生まれる絆があると思いました。今まで出会ったことのない人同士が、何か1つのことを一緒に取り組むことは、あまりない機会であり、参加しただけで仲良くなれることはフィールドワークでしか味わえないものだと思います。また、たくさんの人たちと話をすることで、自分の価値観も変わり新たな発見をすることができると思いました。

二畳大学 3回生

1. 今回大阪市民メディアフェスに参加して、こんなこともメディアになるんだ！と、驚かされることがほとんどだった。どの活動も人手が多いわけでも、認知度が高いわけでもない。しかし、活動している人達は生き生きとして楽しそうだったというのが一番印象に残っている。私はカフェ放送てれれと2畳大学という活動に参加した。どちらも今まで経験したことのないような時間だった。てれれでは、私と20以上年が離れた人とディスカッションする時間があり、年齢の壁を越えて人生や、考え方、就活についてアドバイスをもらったりした。このような時間は普段では作ることができないので、本当に貴重な時間であったと共に、両親や祖父母、近所の方々との会話を大事にしようと思えた。市民の声を発信していくことは本当に少しずつではあるが、その活動こそに意味がある。地道な活動を苦とは思わず、楽しみながらコツコツと続けている人たちとお話するだけで元気をもらった。
2. 「街を歩くこと」でその街にはどのような人々が住んでいて、どのような活動が役に立っているのかを確実に知ることができると思う。ネットや本、それ以外でも調べる手段はいくらでもあるが、実際にその地域へ足を運んで、自分の目や体で感じ取ることで今まで発見できなかったものを発見できると思う。また、その地域の人々と会話をする中で現場の生の声を聞くこともで

きる。その声を元に改善策や新しい企画などもできるのではないだろうか。

なお、フィールドワークの意義についてそれぞれが多様な印章と学びをしたことを一部抜粋して報告する。学生が全員その意義を深く感じていることがわかり、学生を町に連れ出すことに学習成果があることを確認できた。

・現地に溶け込むことが極めて重要です。現地の方からしてみれば私たちは「よそのもの」であり、そのことを十分把握したうえで調査をしなければなりません。信頼関係が成り立って初めて訪問調査ができるのだと思います。また、事前にある程度の勉強をしていき、その土地について詳しくなっておくことも必要だと感じました。

・「人から伝え聞いたこと」と「自分が感じたこと」は、全く違うものであるかもしれない。例えば、今回の釜ヶ崎を例にとると、私は、前述のように「当たり前が覆された」が、違う人は、全く違う解釈をするだろう。「実際に訪問して調査すること」は、人が感じたこととは全く違った視点を持って、その訪問した土地の匂い（今回の釜ヶ崎では、すえたような匂いが印象に残っている）や、その人の様子（今回は、釜ヶ崎では段ボールを敷いて100人以上が寝ている光景が印象的）を材料に、今までの考えを根底から覆してくれるもの（今回の釜ヶ崎では、「当たりの定義」である）である。

・上映会に来た方々と深くコミュニケーションをとった。てれれでみた映像の感想や、実際に映像に携わった方もいたのでその映像の苦労話や裏話を聞くことができた。その話はとてもおもしろいものでもあり、撮影の方法や、撮影の過程も聞くことができ、勉強になった。実際に訪問して調査することにより、作品をみての情報だけでなく、他人の意見や感想、また、今回のように撮影に携わった方が偶然いるということがあり、撮影した側からの話をきくことができるということもある。

・実際に訪問して調査することは、とても重要であると考えます。なぜなら、参加者と意見を交えて議論することは、インターネットや関連する資料を調べて考察するだけでは不可能である、本物のコミュニケーションをとることが可能だからだ。これは、単に議論を白熱させるだけではなく、実際に訪問し交流を深めなければ引き出せなかった、他者の意見を聞くことができたり、他者の意見と自分の意見を重ね合わせることによって、自分の中で新たな結論が出たりと、思わぬ発見を生み出す効果がある。

・実際に訪問すれば、その場にいる人から話を聞くことができる。何かを調査する際に生の声を聞けることは非常に大きい。店であれば客から「なぜここに通っているのか、来ているのか」であったりまた、店の店主なら、「なぜこの店を始めたのか」など、成り立ちであったり来ている理由を聞ける。これらのことはネットなどにはなかなかない情報であるので貴重である。フィールドワークとややかぶる部分があるが分からないことを解決し、聞きたいことを聞くために訪問調査は必要ではないだろうか。

・会う。会って話を聞く。電話よりメールよりはるかに時間がかかる。効率ということだけ考えるのならば効率的とは言えない。しかし、人に会うことはこれら効率的な手段を超える良さがある。まず、誠実に対応することによっていろいろな話をしてくれやすくなる。本人もこうであろうと努力する。自分自身のコミュニケーション能力をきたえつつ、いろいろな話、体験、思いを聞くことができる。

・初めての対外合宿であり緊張した。大人と話す機会や全く今までしなかった他分野のお話を

聞くことができた。この場所にいかなければ決して関わることのなかった人たちである。話すときの敬語、周りをよく見る。いろいろな価値観があり、正直そのすべてを理解し、感じ取ったとはとても言えない。が、社会人の人々には自分たちの知らない世界がありその生まれる前の常識や社会構造を聞くのがとても勉強になった。自分たちの常識や世界観、経験ではとても語れない世界があることを思い知らされた。

・実際にフィールドワークを行い、自分の足で歩くということは、街を知る上で最も適しているように思う。地形や景色、鳴り響く音や交わされる声、漂う雰囲気に至るまで自分の五感を使って体感することにより、メディア媒体には決して載っていない独自の視点で街そのものを捉えることができる。実際に「街を歩くこと」の意義は、その実践によって得られる調査結果が、街の新たな可能性を見出すきっかけづくりとなるところにあると考える。

・今ではインターネットを通じて様々なことを知ることは可能であるが、実際に現地に行かなければ分からないこと、感じるができないことは多くある。ネット上に載っている情報を証明、もしくは新たな発見をするために行うものであると思う。また、実際にその場に行き自分でその地の感じを肌で感じネット等に載っていないことを発見し自分の目的を果たすことに大きな効果をもたらすであろうからフィールドワークは必要であると考えます。

・実際にフィールドワークを行うことは、とても重要であると考えます。なぜなら、実際にフィールドワークを行わないと見つけることのできない地域独自の様々な特色があるからだ。例えば、マスメディアやインターネットでは見つけることのできない、その地域の欠点（環境問題など）と美点（美しい風景、美味しいごはん屋さんなど）をフィールドワークを行うことにより、発見することができる。以上のようなことがフィールドワークを行うことの意義だと考える。

・参加者と意見を交えて議論することは、インターネットや関連する資料を調べて考察するだけでは不可能である、本物のコミュニケーションをとることが可能だからだ。これは、単に議論を白熱させるだけではなく、実際に訪問し交流を深めなければ引き出せなかった、他者の意見を聞くことができたり、他者の意見と自分の意見を重ね合わせることによって、自分の中で新たな結論が出たりと、思わぬ発見を生み出す効果があるのだ。以上のようなことが実際に訪問して調査することの意義だと考える。

・その土地の雰囲気を覚えることができる。これが最大の意義である。私は、上記にあげた『どるめん』での上映会に参加した。上映会場の地理的な情報はインターネットからも得ることはできる。しかし重要な情報はそこではなく、その会場はどのような街の中にあるのかである。今回の場合、路上観察する前のインターネットだけの情報では一般的に上映施設があるようなガラッとした場所に立地しているのだろうと想像していた。しかし実際に訪れると住宅街の真ん中に位置していた。スーパーなども近くにあり、人々の暮らしに溶け込んだ場所であった。また人々に道を尋ねると、会場まで案内してくれ、温かい人が多いこともわかった。このような情報はインターネットには載っておらず、実際に調査しなければ得られない情報である。

・匂いや、味が引き出す雰囲気を覚えることができる。また自分の意見を伝えることができる。私の参加した喫茶店『どるめん』での上映会では、飲食代＝参加費となっていた。マスターの挽くマテ茶を頂きながらリラックスして映像を鑑賞することができた。このような雰囲気は実際に訪問して調査しなくては知ることができない。また、映像に対して意見を伝えることができることで、自分の意見に対する製作者側の意見を覚えることができる。

また、市民メディアの意義についても以下のような記述から理解が進んだと考えられる。

- ・大阪メディアフェスへの参加を通じ、実際に見て、聞いて、ふれあうことで「市民メディアには決まった形がない」ということを改めて学んだ。既存の形にとらわれることなく、自由な発想のもとで発信し、それに共感した人々が集まり「輪」ができる。てれれの上映会に参加した際には、上映後に店主である森下万莉子さんの手料理をいただきながら映像への批評をそれぞれ述べ、談笑した。このように型にとらわれず、自由に発信、あらゆる形でつながりを持つことができるからこそ、市民メディアは人々から必要とされる存在なのではないかと感じた。

- ・市民メディアを観察して、自由に様々な方法で発信することのできるところが市民メディアの美点であると改めて感じた。大阪メディアフェスにおいて、様々な年代の様々な職業の方々とディスカッションする機会があった。そこでは、一人一人がそれぞれに考えていることや思っていることが違って、自分の中に沢山の知識や考えを増やすことができた。このように、多様な意見を交わし、それを皆で共有することで新しい発見ができる点において、市民メディアは必要で重要な存在であるということ学んだ。

- ・普段自分が見ているメディアというのは主にテレビや新聞といったマスメディアである。市民メディアという普段はあまりかかわることのないものを観察できたのは大きい。マスメディアには出来ないことが地域内だけとはいえず伝えることができるというツールは我々に大きな影響を与えるものになりうると思う。地域内だけなら包み隠さずしっかりと伝えられるものであると感じさせられたし市民メディアのシステムや効果について学べたと思う。

- ・大阪メディアフェスへの参加を通じ、実際に見て、聞いて、ふれあうことで「市民メディアには決まった形がない」ということを改めて学んだ。既存の形にとらわれることなく、自由な発想のもとで発信し、それに共感した人々が集まり「輪」ができる。てれれの上映会に参加した際には、上映後に店主である森下万莉子さんの手料理をいただきながら映像への批評をそれぞれ述べ、談笑した。このように型にとらわれず、自由に発信、あらゆる形でつながりを持つことができるからこそ、市民メディアは人々から必要とされる存在なのではないかと感じた。

- ・目的や体系は様々ですが、どの市民メディアも共通して、マスメディアには持っていない力を持っていると学びました。市民メディアには人と人を繋ぐ力があります。発信者と受信者はもちろん、市民メディアは取材者と取材対象者など、コミュニティを生み出すということ学びました。

- ・当時は、コミュニティメディアがどのようなものなのかもよくわかっていなかったもので、市民メディアのあまりの自由さに驚いた。そんな中でてれれの上映会にきていたおばさんが言った「おしゃべりもメディア」という言葉が印象に残った。てれれをみたあとでそれについてお茶を飲みながら映像の批評や雑談、そのおしゃべりまでもがメディアになってしまう、それが市民メディアなのだ。

- ・何でもメディアになりうるのだと感じた。マスメディアではニュース性のあるモノばかりが取り上げられる。しかし市民メディアでは、自分が伝えたいものを伝えたい方法で伝えることができる。この市民メディアがあることで、忘れられつつある問題も発信し続けることができる。マスメディアの弱みを補うものとして市民メディアが必要だと改めて感じた。また、去年の新潟メディアフェスの際お世話になった方々と再会することができ、メディアフェス自体がコミュニティの場となっているのだと感じた。このような繋がりがもっと続けばと思う。

- ・私の中での「メディアの定義」がまったくもって変更された。というのは、今まで、私の中に

あった「メディアの定義」は、「テレビやラジオなど、電波を使ってある程度の広い範囲に物事を伝えるもの」であったからである。しかし、今回訪れた、大阪市西成区にある「NPO 法人こえとことばとこころの部屋」では、一緒にご飯を食べながら「おしゃべり」をする、という新たなメディアのかたちを知った。これは、電波を使わないもので、メディアは、「人と人のつながり」だと思えるようになった。

・発信者の方たちは伝えたいことをありのままに発信し、その発信方法には決まった型がないことを改めて実感しました。特に「釜ヶ崎まちあるき編」に参加した際に聞いた、「お喋りは人と人をつなぐメディア、この場所ココルームはそんな場なんだよ」というお話が大変印象に残っています。やはり共通していえるのは、地域に密着し“つながり“を大事にしているということだと思います。市民メディア活動があるからこそ、喜びを分かち合えて元気が生まれるのだと感じました。

(了)